

編集後記

*『言語文化』第25号をお届けします。今年も、言語文化研究所の多彩な活動を反映する興味深い特集を組み、シンポジウム記録や諸論文を掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々、さまざまな企画の立案・実行にご参加・ご助力をくださった皆様に感謝いたします。

今年度当研究所では、大きなイヴェントとして、舞踏家大野一雄をめぐるシンポジウムを開催しました。本号の特集となっています。また、インドネシア出身の音楽家、フランキ・ラデン・スリヨダルマ・ノストデイルジョ教授による公開講座も行われました。それらに関する記録、諸論文については四方田犬彦教授によるご紹介をご覧ください。また、例年通り、四方田教授を世話人とするポエトリー・リーディング(第七回)も行われました。また、もうひとつの特集として西脇順三郎をとりあげましたが、それについては富山英俊教授の紹介をご覧ください。また、英文学科との共催で、デイヴィッ

ド・キャンベル氏による公開講座「スコットランド語りの世界」も行われました。そのほか、さまざまな読書会や、英文学科の佐野哲也教授を中心とする幼児の言語習得に関する調査研究などが継続されました。

岡本は所長職を三月末で退き、来年度は、芸術学科の四方田教授が所長を務められる予定です。研究所の諸活動の一層の充実を願っております。(岡本昌雄)

*二〇〇七年は舞踏家として国際的に活躍されてきた大野一雄師が、百一歳の誕生日を迎えられた年であった。当研究所はそれを記念し、芸術学科との共催イヴェントとして、二〇〇七年十一月十七日十八日と二日にわたって国際シンポジウム「大野一雄・舞踏と生命」を開催した。今回掲載されたのは、その内容の一部である。中心となったのは芸術学科で芸術メディア系列を担当する演出家の岡本章教授である。簡単に寄稿者の紹介を行なっておきたい。

國吉和子氏は土方巽の研究者として名高く、長らく舞踏をめぐる歴史的研究とジャーナリズムに関わってきた。木村寛氏は新進の美学・ダンス批評の研究者で、

国士館大学などで教鞭を執っている。柳澤田美氏は南山大学講師で、アウグステイヌスを中心としたキリスト教哲学を専攻している。

またパネルディスカッションの参加者を紹介しておく、笠井淑氏は本学出身者であり、現在の日本を代表する舞踏家として大使館を主宰している。氏は大野師の薫陶を受けた若き日のことを回想された。渡辺保氏は歌舞伎を中心とする演劇批評家であり、「女形の運命」などの著書がある。エウジェニア・カジニ・ロパ氏はポロニーニヤ大学芸術学部DANCEの教授であり、「大野一雄アーカイヴ」の中心人物である。ロパ氏のテクストを翻訳した澤田昌之氏は、本学芸術学科大学院修士課程を終えた、気鋭のイタリア映画研究家である。イタリア語の通訳は、黒木弘子氏が担当した。

実は明治学院大学が大野師に敬意を表するのは、これが二度目であった。最初は一九九六年秋にチャペルを用いた。九十歳の誕生日が祝賀され、講演と対談の後、師がプレスリーを背景に舞踏を披露された。今回のシンポジウムでは、そのときのヴィデオが会場で公開された。

*フランキンゲン・スリヨダルマ・ノ
トステイルジョ教授はジャカルタ出身の
現代音楽作曲家であり、音楽史家である。
ながらくトロントのヨーク大学、トロ
ン

ト大学で文化研究と比較音楽学の教授と
して教鞭を執られて、現在はシンガポ
ール大学に移っている。ここに掲載され
たのは、二〇〇七年五月二十九日に開催さ
れた招待研究講座の場でフランキ教授が
発表した、インドネシア音楽が二十世紀
の欧米音楽に与えた影響についての論考
を翻訳したものである。教授が七〇年代
から八〇年代にかけて頻繁に東京を訪
問し、寺山修司をはじめとする演劇人や音
楽家と深い親交を結んでいたことを反映
してか、会場には現代音楽の作曲家や演
奏家の姿も散見された。活字となった形
では再現できないのが残念であるが、講
演はさまざまな音楽作品がテープを通し
て紹介され、フランキ教授みずからが担
当された映画音楽がフィルムを通して披
露されるなど、賑やかで楽しい雰囲気
に満ちていた。翻訳は、当日に通訳を担
当した秋田大学教育文化学部の三宅良美
教授である。三宅氏はインドネシアの舞
踏とジェンダーの研究者である。なお専
門的な用語の翻訳にあたって、音楽学者

である京都市立芸術大学教授の柿沼敏江
氏の校閲を得られたことを、研究所は感
謝したい。(四方田犬彦)

*いうまでもなく西脇順三郎はかつて
本学の教授を務め、また一九八三年の本
誌創刊号は、「西脇順三郎先生追悼」を
特集としました。二〇〇七年は、慶応義
塾大学出版会より、新倉俊一本学名誉教
授の編集による『西脇順三郎コレクショ
ン』六巻が出版されたように、歿後二十
五年ということもあり、諸所で学会や雑
誌特集が組まれました。『言語文化』も、
ささやかながら特集を組んだ次第です。

執筆者を紹介します。飯野友幸氏は、
上智大学教授で、アメリカ現代詩の研究
者であり、ジョン・アッシュベリーに関
する研究書、またアッシュベリーやポー
ル・オースターの訳詩集を出版されてい
ます。今回は、歩行の詩という観点から、
西脇とアメリカ詩人A・R・アモンズとを
並行させて論じています。佐藤紘彰氏は、
ニューヨーク在の著述家、翻訳家で、P
ENアメリカ翻訳大賞と日米友好協会翻
訳文学賞の受賞者です。万葉集から宮沢
賢治、高村光太郎から三島由紀夫、吉増
剛造まで、数多くの日本文学を英語に翻

訳し、北米俳句協会会長も務められまし
た。近著には、西脇の、また宮沢賢治の
英訳詩集があり、さらに『Japanese Women
Poets: An Anthology』出版されています。
二〇〇八年五月には本研究所で、それを
記念して招待研究講座が開催される予定
です。また富山は、西脇順三郎の詩行の
特性について序説を寄稿しました。

つぎに、長畑明利氏は名古屋大学教授
で、アメリカ文学研究者であり、ウォレ
ス・ステイヴンズ、ハート・クレインな
どについて論考を発表されています。今
回は、「哲学的」な思索をふくむ長篇詩
という観点から、西脇とステイヴンズ
との興味深い比較を行っています。山内
功一郎氏は、静岡大学准教授で、やはり
アメリカ詩研究者ですが、マイケル・パー
マーの訳詩集を出版されています。また、
日本の現代詩について雑誌『現代詩手帖』
などに寄稿されていますが、今回は西
脇詩の読解可能性という本質的問題につ
いての論考を提示しています。

(富山英俊)